マッセ・市民セミナー
（NPO法人ちゃいるどネット大阪共催）

保育の質を高めるために
－子どもが育つとは？－

開催日：令和元年７月12日㈮
会　場：アネックスパル法円坂 なにわのみやホール（７階）

マッセ・市民セミナー
（ちゃいるどネット大阪・マッセOSAKA共催講座）（北摂・中部ブロック）

保育の質を高めるために
ー子どもが育つとは？ー

大豆生田　啓友 氏
（玉川大学）

日時：令和元年７月12日㈮　14：00～16：30
会場：アネックスパル法円坂　なにわのみやホール（７階）

１．教育・保育を取り巻く大きな変化

今、子育てや保育のことが、社会で大きな論点の一つになっています。恐らく戦後、これほど保育という言葉が語られる時代はなかったと思います。しかし、保育が話題になって子どもたちや保育士の先生方は得をしているのだろうかと、ふと考えると、そうではないことに気付かされます。

例えば、全ての子どもに質の高い教育を保障するためにということで幼児教育の無償化がスタートしましたが、11時間も保育するために無償化している国はほとんどありません。世界では、先生方が毎日されている保育が大事だから、そこにお金をかけましょうと言っています。しかし、日本では残念ながら子どもを預かってくれる場所というぐらいにしか扱われていません。日本は普通ではない形の無償化と考えていただいた方が納得しやすいと思います。

それから、もう一つ話題になっているのが、待機児童と保育士不足という深刻な問題です。これも何とかしなければいけません。

そうした中で、私たちはこれをどう逆手に取れるかということを考えなければいけないわけです。預かるだけでなく、教育をしている園もありますが、それは乳幼児期にふさわしいとは言われてません。質が高いということは、預かっているだけでもなければ、早くから何かを教えることでもありません。では、何が大事なのでしょうか。実は、先生方が毎日何気なくやっていらっしゃることの中にこそ大事なことがあるということを、これからお話しさせていただこうと思います。

２．乳幼児を育てる大切な二つの視点

２－１．手作りのこいのぼり

私は年間を通していろいろな園に行きます。ある園では、ゴールデンウィーク明けに

園庭に手作りのこいのぼりがたくさん飾ってありました。年長さんが10日間かけて作ったこいのぼりだそうです。担任から「今年は自分たちでこいのぼりを作ってみない？年長さんだから何人かでチームになって作ってみるのはどう？」と提案されて、「いいね、やろうぜ」という話になって、みんなで材料はどうするかというところから話し合いました。先生は紙で作るものと思っていたのですが、「本物は布じゃん」ということで多くのグループが布を選び、それを染めたり縫い合わせたりして、結構手が掛かっています。子どもたちがいろいろな意見を出し合いながら作ったので、明らかに子どもたちの満足感や達成感は高いです。「俺たちね、こうやって作ったんだよ」と、知らないおじさんである私に、丁寧に説明してくれました。自分たちが作ったこいのぼりが自慢で、しゃべりたくて仕方がないのです。実はこの語るというのはとても重要なことで、面白い園の年長さんはすごく豊かで、明らかに育っています。よく語る姿を見て、いい年長さんだなと思いました。

この後、職員室のソファに座って園長先生とお話ししていると、３歳の男の子が１人入ってきました。３歳のクラスはとっくに集まっています。部屋から抜け出てきたのです。こういうことを言ってはいけませんが、あまり担任を持ちたくないタイプの子です。その子は私のところに直行してきて、私の膝にちょこんと座りました。そして、「あのさあ、俺さあ」と、私に向かってずっとしゃべり続けているので、少しからかってみました。髪の毛を格好良く立てていたので、「髪の毛かっこいいね、誰が切ってくれたの？」と聞いたら、「は？」と言うのです。こういう子は人の話を聞いていません。もう１回聞くと、「先生」と言うのです。それを聞いていた園長先生は、「何を言ってるの。先生が髪の毛を切るはずないでしょう。お父さんかお母さんが切ったのでしょう」と言って焦っています。この子はうそつきなのです。このうそつきはさらに「俺さあ、こいのぼり作ってさあ、あそこに飾ったんだ」と言うわけです。いやいや、年長さんが10日かけて作ったって聞いたからうそだなと思いました。「うそじゃねえもん。俺さあ、新聞紙で作って持ってったらさあ、『おまえいいやつだからいいよ』って飾ってくれたもん」と言うのです。絶対にうそだと思ったのですが、改めて見てみると真ん中に新聞紙が引っ掛かっていました。

「ごめん、うそだと思ってた」「うそじゃねえもん」。そんな話をしながらも、ずっと私の膝に座っているので、早く部屋に戻してあげないと担任に悪いなと思って、彼に「担任の先生のお名前は？」と聞くと、「は？」と言います。人の話を聞いていません。もう１回聞いたらやっと、「リョウコ」と答えました。そして、「リョウコさあ、俺のことといつも『かわいい、かわいい』って言うんだよ」と言いました。すると園長先生が「私もあなたのことをいつも『かわいい、かわいい』って言うでしょう。私のことも言ってよ」と言うのです。この話はこれで終わりです。

なぜ冒頭にこんな事例を持ってきたかというと、いい園だなと思ったからです。実は、乳幼児期に一番大事なことが、今の事例の中に二つ隠されています。一つ目は、３歳の男の子への関わり方です。この子を担任したらきっと大変です。でも、この子は担任か

らも園長先生からも「かわいい、かわいい」と関わられています。恐らく年長さんもそうやって育てられてきたので、年長さんがこの子に「おまえいいやつだからいいよ」と言うのです。これが一つ目の大事なポイントです。

こうした手厚い関わり方をすることは、言うほど簡単ではありません。皆さんの目の前の、あの子の話です。その子は先生方から肯定的に関わられているでしょうか。例えば、保育中に引っかきやかみつきのようなことがあったとき、先生方は保護者にどのように伝えられているでしょうか。問題行動が多いと、私たちはついつい、またやったのかという気持ちになってしまいますが、子どもの側に立って、その子が手を出さざるを得なかった気持ちをきちんと受け止めてあげようとすることで、肯定的に関わることができます。そして、連絡帳にただ「今日もまたお友達を叩きました」と書くのではなく、手を出してしまったのにはきっとこういう理由があるのかもしれないと、なるべく具体的なエピソードを、子どもの目線で保護者に伝える。そうすることで、怒って終わりだった親も、子どものことを肯定的に受け止められることが多くなります。親にどう伝えるかでも大きな違いが出てくるということで、家庭をも巻き込んでいく、まさにプロの仕事です。

話が寄り道しましたが、一つ目のポイントは、乳幼児期に大人から受容的、肯定的、応答的に関わられることが多かった子どもは、明らかに発達がいいということです。このことはいろいろな研究で明らかになっています。これを保育所保育指針に照らし合わせると、「養護」ということです。養護を英語で言うとケアです。お世話だと思うかもしれませんが、専門職のケアは、お世話ではありません。目の前の人に対して心を尽くして関わることです。つまり、一人ひとりの子どもに対して、尊厳を持って関わるという意味です。今回の指針では、養護が基盤であると位置付けられました。一人ひとりを大事にすることが、保育の基盤だと言っているわけです。当たり前のようですけれども、言うほど簡単なことではありません。

二つ目のポイントは、主体的、対話的に「やり遂げた」「できた」という達成感や成功体験、言い換えれば深い学びを経験している子どもたちは、明らかに発達が良いということです。年長さんが試行錯誤しながら夢中になってこいのぼりを作ったように、子どもたちが遊び込んでいるかどうか。違う言葉で説明すると、ブームが起こっているかどうか。「今、これが面白くて面白くて仕方ない」が起こっているかどうか。これが、子どもが育っているかどうかの一つのバロメーターになると思います。単に遊ばせることは家庭でもできます。しかし、遊び込むようにさせるのはプロの仕事です。先生方の手が入っているから、子どもたちにブームが起こるわけです。言い換えれば、子ども主体の遊びが学び、幼児の「教育」です。私たちは遊びが学びだと言うのですが、遊ばせているだけでは学びになりません。夢中になって「こうしようぜ」「ああしようぜ」「こうしたら面白いかな」というようなことが起こっているから、遊びは教育だと言えるわけです。保育所保育指針では、この養護と教育が一体的になされることが質の高い保育だとしています。幼稚園教育要領には養護とは書かれていませんが、一人ひとりという

ことが丁寧に書いてあって、同じ意味だと理解しています。

ここから後は、ずっとこの二つのポイントについていろいろな角度から話していきます。

２－２.『セミの一生』と『あまだれぽったんのはなし』

前半は大きい年齢の子の話が続きます。東京都の公立保育園の事例で、８月の保育の話から始まります。この園の年長さんのブームはセミ捕りでした。セミ捕りが面白くて面白くて仕方ありません。このクラスの子たちは、セミの話題になるとみんなで頭を突き合わせて話をします。ただセミを捕っているだけではこうはならなくて、それには理由があります。担任は絵本が大好きな先生で、セミ捕りがブームになったので、保育室にいろいろな種類のセミの絵本を置いておきました。図鑑もありました。子どもたちはみんなセミ博士のようになっています。学びが起こっているというのはこういうことです。

子どもたちはセミを部屋に放し飼いにしていたのですが、あるとき「先生、セミってさあ、お部屋に入れるとだんだんおとなしくなるよね」と言った子がいました。先生は、冷房がかかっているので弱ってきているのだと思ったのですが、それを口には出さず、黙って『セミの一生』という写真絵本を持ってきました。保育で写真絵本や科学絵本を使わないのはもったいないです。セミの一生のことを、子どもたちはみんなもうよく知っていました。でも、改めて『セミの一生』の絵本を読んでもらって、子どもたちは絵本の中のある言葉に衝撃を受けました。「セミの幼虫は５年間土の中にいて、６年目に出てくるのです」と先生が読んだ瞬間、一人の子が「俺と同じ６歳だ」とつぶやいたのです。すると、みんなシーンとしてしまいました。セミは自分たちと同じ生き物だと気付いたのでしょう。この後、セミを放し飼いにする子は誰もいなくなりました。

そこで、先生はもう１冊絵本を持ってきました。『モグラくんとセミのこくん』という絵本です。土の中でモグラくんとセミの幼虫のセミのこくんが出会い、２人は親友になります。モグラくんはセミのこくんに「君はある年が来たら、ここから出ていっちゃうんだよね」と言ったら「僕は絶対に出ていかない。だって君と親友だから」と言いました。そして、ある年、セミのこくんは固まって動けなくなりました。焦ったモグラくんは、セミのこくんを土の上に上げました。息を吹き返したセミのこくんは、木によじ登って脱皮し、土の中にいるモグラくんに聞こえるように大きな声で鳴きましたという話です。このときも、一人の子が「俺たちも今年でお別れだよな」とつぶやきました。クラスのみんながいとおしくて仕方がないのです。子どもたちは明らかに育っています。これは、担任の先生だけが偉いわけではありません。この園全体でみんなが一人ひとりの子どもと丁寧に関わり、そしてやりたいことを夢中になってやることを大事に育ててきたのです。明らかに育ちが違います。

この話にはまだ続きがあります。秋の話です。このクラスには、発達がゆっくりのお嬢さんが一人います。色白のかわいらしいお嬢さんです。言葉はあまり豊かではあり

ません。何を考えているか、実は周りもよく理解できませんでした。ところが、この子がある日、手作りの絵本を作ってきました。10ページにわたる大作です。『あまだれぽったんのはなし』という名前が付いていました。クラスで「あまだれぽったん」の歌を歌ったとき、この女の子は歌わなかったそうです。ところが、手作りの絵本を開いてみんながびっくりしました。お母さんもびっくりしたそうです。普段から絵を描くことはあっても、お話を作ることはなかったので、お母さんは子どもが絵を描きながら喋る言葉を全部書き留めました。「ここは雲の保育園です。あまだれぽったんたちが元気に遊んでいます」と書いてあります。一人の子が「これ、俺たち年長組の話じゃん」と言いました。そうです。この女の子のクラスの話です。１ページ１ページに毎日のことが書かれています。私は保育室でするこういう遊びが大好き。園庭でするこういう遊びが大好き。お散歩に行ったときの公園でするこういう遊びが大好き。遠足でバスに乗ったときにこういうことが面白かったなど、毎日の保育園の中であった小さな出来事で私はこんなに幸せなのだということが、１ページ１ページに書かれています。担任の先生は、この話をしながら毎回涙ぐみます。「保育の仕事は忙しいので、毎日をこなすような感じなのです。この子が描いたものを見て、私は駄目な保育士だなと思います」と言うのですが、そんなことはありません、素敵な先生です。

絵本には、あまだれぽったんたちが描いてあります。上には園長先生が、一番右には担任の先生が描いてあります。担任の先生は子どもと同じ大きさで、しかも横並びです。担任の位置付けが見えてくるなと思いました。しかも、あまだれぽったんの顔を見てください。全員顔が違うのです。クラス全員の子を描き分けています。それくらい、クラスの子たちが大好きで仕方ないわけです。女の子は続きを描き始めて、毎日『あまだれぽったんのはなし』の続きができるので、それが毎日読まれることになりました。連載です。『おてて絵本』もそうですが、子どもは、子どもが作ったストーリーもないような支離滅裂な話が好きですよね。

この後、面白いことが起こりました。「俺たちもこういう話を作りたい」となって絵本づくりができる場所が設けられ、そこからクラス中で絵本づくりブームが始まりました。４、５歳ぐらいで絵本づくりブームが起こるというのは、すごく大事なことです。子どもたちが自分でお話を作ったり、字を書いてみたりすることは、語彙力を養うのにいいに決まっています。文字の書き方を教えるよりも、国語力がはるかに付くと思います。それも、できればこちら側から投げ掛けるよりも、子どもたちから起こると、なおいいです。この後、絵本づくりブームは３か月続き、いろいろな連載が誕生しました。園長先生のお友達の絵本作家を呼んでワークショップをやったら、ものすごく盛り上がったそうです。

そして、色白の女の子は卒園式で、「みんなに話したいことがある。私、将来、絵本作家になると決めた」と宣言しました。今、この女の子は小学校２年生で、支援級に行っているそうです。学校が嫌なこともあるそうですが、保育園の担任の先生のところにしょっちゅう戻ってきては、「先生、私、将来、絵本作家になるという夢、変わって

ないからね。先生も頑張ってね」と言うそうです。

このように、小さな頃にどういう保育に出会ったか、どういう先生に出会ったかということが、後々に影響を与えることもあるということです。そうだとすれば、私たちの仕事はやはり大事です。先生たちが何気なくしている毎日の保育は、社会からもっと感謝されるべきですし、社会的な待遇がもっと上がるべきです。そして、どこの園でも子ども一人ひとりが肯定的に関わられ、一人ひとりが夢中になって「できた」と言える保育が保障されることが大事です。このことを、声を大にして国に訴えていかなければいけません。

３．非認知能力（社会情動的スキル）

非認知能力とは、意欲や自尊心、粘り強さ、自己制御、人と関わる力とされています。これらが保育で大事にされているでしょうか。まず、意欲とは、０歳から夢中になって遊び込む子が育っているかということです。これは言うほど簡単なことではありません。

また、自尊心とは、すなわち自己肯定感です。日本人は自己肯定感が極めて低いことが分かっています。中高生の７割が自分は駄目な人間だと思うと答えています。他にそういう国はありません。大人はもっと低いそうです。自己肯定感が低いと幸せを感じにくく、ポジティブに生きていくことができず、コミュニケーションを取ろうとしません。いくら英語だけを勉強しても、コミュニケーション力がなければ役に立ちません。これは新しい話ではなくて、今までも幼稚園教育要領・保育所保育指針では心情、意欲、態度が大事だと言ってきました。

自尊心、自己肯定感を育てるためには、大人から手厚く関わられることと、達成感を持つことが大事だと言われています。

そして、粘り強さです。夢中になって遊び込む子は、うまくいかないことがあってもその困難を乗り越えられます。ですから、遊び込むことが重要だと改めて言われています。

それから自己制御、自分の気持ちをコントロールさせることには、厳しいしつけや生活習慣は逆効果だと、いろいろな発達研究で明らかにされています。脳科学では、むしろしつけで大事なのは、厳しくすることではなく、自分の気持ちを切り替えることだと言われています。怒るだけだと、怒られると怖いからするだけで、自己制御になりません。もししつけが厳しい園があるとするならば、一番見直さなければいけないところです。しつけが厳しい園は、先生たちが子どもに肯定的に関わることは多分少なくなると思います。禁止事項が多い園もそうです。これは極めて重要なことです。

それから人と関わる力、コミュニケーション力で、異年齢の子ども同士の関わりなど、多様な人と関わることが重要で、小さなけんかやトラブルがあることも大事です。これらが、非認知能力と言われるものです。

４．子ども主体の保育を目指す第一歩　五つのポイント

ここまで、保育の中では養護と教育、一人ひとりが手厚く関わられること、夢中になって遊び込むことで、根っことなる非認知能力が育てられることが大事なのだという話をしてきました。では、そういう保育をどう作っていくかということを、これから具体的に話していこうと思います。事例がたくさん出てきます。ここまで大きい年齢の話が続きましたが、私は先ほどから何度も０歳児からですと言っています。今回の指針がすごいのは、１歳児、２歳児という領域の観点が入ったことです。つまり、３歳未満も含めて子どもを育てることが大事で、預かっているだけではないということがきちんと位置付けられているということです。

５－１．環境を充実させよう！

横浜の私立保育園の話です。５月に暑い日が続いたこともあって、外遊びで大きい年齢が色水遊びをしていて、１歳児さんがそれにすごく関心を持ちました。色水のところに１歳児さんまで並んでいたので、予定には１歳児さんは入っていなかったのですが、担任は１歳児も色水で遊ばせてあげようと思いました。ここが今日の話の一つの重要なところで、計画の話です。子ども主体の保育を生み出すかどうか、子ども主体の学びが生まれる保育であるかどうかは、計画どおりにしかしない保育なのか、計画外でも子どもたちが興味・関心を持ったらしようと思うか、ここが大きな分かれ目になると思います。

そして、担任の先生は１歳児さんの中でも月齢の高い子と低い子で遊び方が違うことに気付きました。月齢の低い子たちは、とにかく入れてはこぼす、入れてはこぼすが大好きです。一方、月齢の高い子たちは道具を使って遊ぶことが面白いようだというので、れんげやおたま、ペットボトルなど、いろいろな道具を出したところ、色水そのものというより、水の出し入れ、移し替えを繰り返し繰り返しやるようになりました。それが何日間か続いていたので、担任の先生のアイデアで、ガーデニング用の水差しやシャンプーボトルを出してみました。１歳児には少し難しいので、私なら出しません。ところが、これが意外と面白かったのです。１歳児さんの集中時間は短いというのは大うそです。遊び込んでいる子たちは、こうしたらどうなるだろう、ああしたらどうなるだろうと、ずっとやっています。これが試行錯誤です。学びは試行錯誤ですから、これが起こっているということは、学んでいるという印です。

そして、ブームが起こると、普段やらないような子も集まってきて群れができ始めます。これがいわゆる環境です。世界では、環境を見れば保育の質が分かると言われています。例えば、０歳児から子どもが使いたいものを自由に取り出せるようになっているでしょうか。長時間保育をしているのに、真ん中にブロックだけをばさっと出されて「はい、遊んで」では、子どもたちに選ぶ権利がありません。やりたいことを自分である程度選べるということは人権にも関わる問題で、第三者評価の評価項目の一つです。

そして、部屋の中で場が分けられているかどうかです。たまに０歳児が20人ぐらいい

るクラスで、担当制も取らない上に、だだっ広いところにみんなでいて、わんわん泣いている園があります。場を分ければ落ち着くのにと思います。大きい年齢ではそれをコーナーやゾーンと呼んだりしますが、場を丁寧に分ける工夫がなされていることが重要です。

さらに、自由に取り出せるだけではなく、ある程度の種類があることも重要です。長時間の保育で取り出せるものがない、種類が限られているとしたら、子どもたちの育つ環境としてはマイナスが大きいに決まっています。これからは環境の構成という観点が重要で、つまりそれは子どもが人として大事にされるということを意味しています。ままごとコーナー一つとっても、何を置けば子どもたちのままごとが盛り上がるでしょうか。ままごとやごっこ遊びの創造力が、学びの力にすごく重要だと言われています。なりきれることがすごく大事だと言われています。年齢によっても違ってきますが、今の環境で遊びが十分盛り上がっているのでしょうか。そして、長時間過ごす場所なので、居心地がいいかどうかも大事です。海外ではソファがよく置いてありますし、日本で工夫して畳を敷いているところもあります。あるいは、人が生活する場所と考えると、潤いが必要です。皆さんは、植物があるとほっとしませんか。植物があることも環境の一つだと思います。

そして、高いおもちゃを置けばいいという話ではなくて、戻す場所の工夫も含めて、０歳からの環境で子どもたちが豊かなものに出会えるようになっているかどうかということがすごく重要です。いろいろな保育園を見てきて思うのは、先生が丁寧に子どもと一緒に取ったり出したりして手厚くしてやれば、子どもも戻せるようになっていくのではないかということです。例えば、世界的にぬいぐるみや人形は環境としてすごく重要だと言われています。ある保育園で２歳児の女の子が、夕方４時過ぎぐらいにクマのぬいぐるみにお布団を掛けてトントンしていました。女の子はぬいぐるみに「大丈夫だからね。お母さん早く帰ってくるからね。待っててね」と言うのです。クマのぬいぐるみは自分自身です。自分で自分のケアをするということが長時間の保育の中では重要で、そのためにぬいぐるみや人形はすごく大事です。特に小さい年齢では、ある程度の数が取れるようにしておくといいと思います。この保育園では、人形をばさっとかごに入れておくのではなくて、ベッドにお人形を寝かせたりしています。人形が丁寧に扱われるように、あなたたちも丁寧に扱われる存在だからねというメッセージなのです。

５－２．遊びを盛り上げよう！

子どもたちはよく石を拾ってきたり、草花を採ってきたりして「先生、あげる」と言います。先生方はそれをどうされていますか。ある園の３・４・５歳の縦割りのクラスで、３歳の子が登園途中できれいな石を拾ってきて、「先生にあげる」と言ったそうです。先生は「きれいな石。すてきね。大事にするね」ともらった後、「みんなにも見てほしいから、宝物箱を置いてみんなが見られるようにしておいてもいいかな？」と言って、石を保育室の環境に置いておきました。すると１人の子がそれに興味を持って「俺

もああいう石、採ったことあるよ。うちの近くにそういう石とかこういう色の石がある」と言いだしました。遊びを大事にする保育は、遊びの後が大事です。特に３歳以上で集まりの時間が大事にされているでしょうか。今、今日の遊びの中で面白かったことや発見したこと、うまくいかなかったことなどをみんなで共有する集まりの時間がすごく重要だと言われています。

この園では、翌日以降、遊びの中できれいな石探しが始まりました。しかし、園庭にはきれいで大きな石はありません。そこで、先生は毎日、「今日面白かったこと」というテーマで写真を１枚貼り出しておくことにしました。これをドキュメンテーションと言うのですが、それをたくさんの親子が見て、朝、親子で石を拾ってくる子たちが出てきました。あまりに盛り上がって、週末に河原に行ってお父さんと一緒に石をたくさん拾って持ってくる子が出てきて、「ごめんなさいね。今日はうちの子にたくさん石を持たせたから、先生よろしくね」と言うお母さんもいました。これからは、親を巻き込んでいる園とそうではない園で大きな差が付きます。親と園との循環がある園とない園で、これから二極化すると思います。親を巻き込めていない園では、親は11時間も無料で預かってくれるサービスだと思い、要求ばかり多くなっていって目も当てられないことになります。これからは親を巻き込めるかどうかであり、巻き込むためには起こっている面白いことを見える化することです。親たちにきちんと見える化しているかどうかというのは今回の指針改訂の中での重要なポイントの一つで、親たちを巻き込めている園では変な苦情はなくなります。

この園のある子が、お父さんに「俺、石の図鑑を買ってほしい」とお願いしたそうです。普通、３～４歳ぐらいの子は、ゲームソフトが欲しいとは言うかもしれませんが、「石の図鑑を買ってくれ」とは言わないですよね。園の役割は大きいのです。その子は、「石の図鑑を買ってもらった」と、うれしそうに園に持ってきました。それをみんなで見ていると、石にはいろいろな種類があると書いてあります。それまでは、○月○日に拾ってきた石と書いていたのですが、この後、石の種類で分類を始めました。面白くなり始めました。

宝石も石なのだということで、子どもたちはどこかに落ちているのではないかと宝石探しを始めます。落ちているはずはありません。ではどこに宝石があるのか、子どもたちは侃々諤々（かんかんがくがく）です。一人の子が「あそこの商店街に宝石屋さんがある。行きたいな」と言うので、園長の了解を取って宝石屋さんに電話をしてみたら、「触らせられないけれど、来るのはOK」ということで、宝石屋さんへ行って宝石を見せてもらったり、宝石はどうやって作っているのかを教えてもらったりしました。宝石は割ったり磨いたりしていることが分かって、自分たちで石を割ったり磨いたり、その後２か月ぐらい宝石屋さんごっこが続きました。これはもう非認知能力ではありません。目に見えない心や社会性ではなく、目に見える科学です。非認知能力をベースに身に付けた子どもたちは学ぶようになっていくので、いろいろなものをもっと知りたくなってくるのです。それが科学する心です。日本の保育は科学が弱いと言われています。夏の

お泊まり保育でも、星空をみんなで観察すると、ついつい星空から何かが降ってきてというファンタジーの方に話が行きがちですが、世界では普通は科学する方につなげるそうです。あるいは、日本の保育はお店屋さんごっこをする割には、お店を見に行かない園が多いと言われています。この園では、一人の子が石を拾ってきたところからブームが始まりました。そして、親は誰も遊んでいるだけだとは思っていません。みんな科学していると思っています。どこの園でもできることです。

５－３．練習を減らそう！

ある保育園では、行事が先生たちにとっても子どもたちにとっても負担が大きすぎるのではないかということが問題になりました。運動会の前になると練習ばかりしていたのでは、子どもも先生もどちらも幸せではありません。それならば、園でブームになった遊びを競技に入れてしまえばいいのです。盛り上がった踊りもあったし、盛り上がった運動遊びもあったでしょう。運動会でそれをやって、子どもが楽しくやっていたことを親たちに見せればいい。そうすれば先生たちも無理なく運動会ができます。行事がいろいろなことをやるのにネックだと全国でお聞きしますが、どこの園でもそうすればいいのにと思います。

同様に、保育室の壁面にウサギやパンダがたくさん貼ってあります。先生たちはみんないつも忙しいと言っているので、忙しいならあれをやめればいいのにと私はいつも思っています。あれが役に立つ理由を私に説明してくださいと言っても大抵は説明できないので、もう少し楽に「写真を貼りませんか」と言っています。子どもたちが消防車に興味を持っているのなら、消防車を見に行ったときの写真を貼っておいた方が絶対にいいです。ままごとコーナーには、女性誌のきれいなケーキの写真を貼っておくと、「こういうのを作る遊びをしようよ」と触発されます。頑張って手作りもいいですが、世界では写真を貼ることが多いです。楽して得するというのはどうでしょうか。子どもたちが面白そうだと思っている写真を貼った方が良くないでしょうか。あるいは、光と影で遊ぶのもすごく面白いです。窓にセロファンを貼るだけで、子どもたちはすごく知的な、科学的な興味を持ちます。手が赤くなったり、みんなで色を追い掛けたり、すごく面白いです。

また、絵本はすごく大事です。遊び込む保育、話し合いの場面のあるような保育を受けた子たちは、教えられるよりも明らかに語彙力が高まることが分かっています。もう一つ、絵本の読み聞かせが充実している子ほど語彙力が高くなることも、研究で明らかになっています。絵本に力を入れないのはもったいないです。０歳児からいい絵本がたくさん手に取れるようになっている園では、子どもたちは絵本が大好きで、４～５歳のお姉さんが２歳児に絵本を読んであげるような風景も見られます。いい風景です。

その中で、子どもたちが大好きな一冊が『てんとうむしぱっ』です。「てんとうむし、ぱっ」「チューリップ、ぽっ」「だんごむし、ころ」「かめ、あれれ」「かたつむり、なーに」「しゃくとりむし、にゅ」。園庭で遊んでいる子どもたちの頭上にいた尺取り虫を見

て、発達が少しゆっくりな、普段言葉があまり出てこない子が「にゅっ」と言いました。先生は、たんぽぽ組の子どもたちが登場する続きを作ってみました。「ちなみちゃん、ごろん」「ゆいぽん、おどった」「あいちゃん、ぷい」「ほのちゃん、あっかんべー」「あーちゃん、ぺたん」「ゆーとくん、おでかけ」と、一人ひとりの特徴を入れて作ってみたら、一人で読む子もいれば、友達に読んであげる姿もあって、大ブームになりました。子どもたちが夢中になったので、今度は「しゃぼんだま、ふっ」「しゃぼんだま、ふう」「わたげも、ふう」「たんぽぽも、ふう」「あれ、黄色が鼻に付いちゃった」。自然の生き物や植物に興味を持った子どもたちが、こうやって写真にしてあげることでさらに外遊びで自然物を採ってくることが面白くなり、この後すごく続きましたという話です。子どもたちは、子どもたちが出てくる写真が好きです。特に０・１・２歳ぐらいは、自分たちが映っている写真をコーナーに置いておくだけでも非常に意味があります。

５－４．保護者もファンにしよう！

東京の公立保育園でも、子どもたちは顔写真が載っている絵本ばかり読めというので、ハルエ先生は手作りで作ったらもっと面白いのではないかと思って、０歳担当の４、５人の先生全員の顔写真を撮って、「○○先生が、いないないばあっ」という絵本を作りました。みんな食い入るように見て、そればかり読めと言うようになりました。大好きな先生たちが『いないないばあっ』の絵本に出てくるわけですから、それは面白いです。ハルエ先生がこの絵本を持ってくると、みんながすっと集まってくるようになりました。それを聞いて、私は子どもたちがなぜ絵本が好きになるのかが分かりました。人から入るのです。逆に、子どもたちを絵本嫌いにさせるのも簡単です。先生が怒って「○○ちゃん、お背中ぺったんでしょう」とずっと言っていると、クラスの子どもは絵本が嫌いになります。

先生の「いないないばあっ」写真がブームになったので、ハルエ先生はさらにひらめきました。子どもの写真でやったらもっと面白いのではないかということで、「○○ちゃんが、いないいないばあっ」というものを作りました。これは面白かったです。子どもたちはそれをじっと見た揚げ句、「おまえじゃん。おまえ、出てんじゃん」というような感じになるのです。０歳児では１対１の対応は大事ですが、いい保育は子どもたち同士も繋ぐのです。０歳児にこんなに絵本を読んでいいものかと悩むほど子どもたちは絵本が好きになり、この絵本だけでなく、ハルエ先生が絵本を持ってくると、どういう絵本でも子どもたちが集まってくるようになりました。

ハルエ先生は、月の計画にあった絵本をただ持ってくるのではなく、遊びの中からこういうものが好きだろうと思った本を選んで持ってくるところがポイントです。このときブームだった絵本は『おおきいちいさい』でした。大きい小さいを繰り返しているだけの単純な話です。１歳児クラスの子たちは、絵本を読むたびに「ハルエ」と「大きい」しか言いません。「ハルエ」は分かります。ハルエ先生のことが大好きだとみんな言っているだけです。しかし、「小さい」も読んでいるのに、なぜ「大きい」しか言わ

ないのでしょう。ハルエ先生は途中で気付いたそうです。１歳児に上がってきたときに、子どもたちは最大の褒め言葉として「大きくなったね」と、みんな言われたのです。大好きな言葉だから「大きい」なのです。

それならば、大きいということをもっと楽しんでしまおう、絵本以外に大きいものを出そうとハルエ先生は思いました。子どもが興味・関心あるものを環境に出すことがいいと先ほどお話ししましたが、ハルエ先生が考えたのが写真壁面です。いろいろな動物の写真を壁面に貼りました。特に人気があったのはゾウでした。ここから「ハルエ」と「ゾウ」と「大きい」のブームです。ゾウが出てくる絵本はたくさんあるのですが、子どもたちが好きなのは小さなゾウではなくて大きなゾウです。そこで、Amazonで「絵本、ゾウ、大きい」で検索すると、『ぞうはおおきい！』というびっくり絵本が出てきました。子どもたちはその絵本にノリノリで引き込まれていくわけです。あまりに面白くて毎日がゾウなので、ハルエ先生は動物園でゾウを見せたくて園長に提案したのですが、公立だからなのか、連れていくことができず、仕方がないのでハルエ先生は日曜日に一人で動物園に行って写真をたくさん撮ってきました。それを子どもたちに見せたらまた大ブームです。

東京の港区にある幼稚園で、各国の大使館がたくさんあるところです。この園のすぐ前にある国の大使館があって、ゾウのモニュメントが飾ってあります。１歳児クラスの子たちは、毎日通るたびに「ママ、ゾウ。ママ、ゾウ」と言うわけです。親たちは何の話かさっぱり分かりません。あるお母さんが「ハルエ先生、うちの子たちは毎日『ゾウ、ゾウ』と言っているのですが、何があったのですか」と聞いてきました。ハルエ先生は「今、１歳児クラスみんなで、ゾウの鼻はどうなっているか、耳はどうなっているか、しっぽはどうなっているかと、ゾウの研究をしています」と話しました。するとその後、半数以上の家庭が動物園に行ってゾウを見てきたというのです。さらに、「うちの子は絵本が好きになったから、クリスマスプレゼントは絵本にしたいんだけど、ハルエ先生の一番のおすすめは何ですか」と聞かれたハルエ先生は、「私の推薦よりも、○○ちゃんは車が好きだから、こういう車の絵本はどうですか」と相談に乗って、その年、半分以上の親がクリスマスに絵本をプレゼントしたそうです。ハルエ先生のクラスの親たちは、ハルエ先生のファンになりました。園長先生もさすがの方で、ハルエ先生だけが人気者になるのもどうかということで、他の先生たちにもこれを広めていきました。こうして親も巻き込んで、親たちはこの園全体のファンになっていきました。つまり、子どもたちに面白いことが起こり、それを親たちに見える化して、親たちが理解者になっていくことがとても大事だということです。これはどこの園でもできることです。

５－５．イライラを減らそう！

皆さんは、赤ちゃん絵本には顔が出てくるものが多いことをご存じでしょうか。考えてみれば、『いないないばあっ』『おつきさまこんばんは』『かおかおどんなかお』など、みんな顔です。赤ちゃんは顔が好きなのです。赤ちゃんは早い段階から大人の表情を見

て、その人の気持ちを読み取ろうとしているということが分かってきています。小さい子でも、先生たちが不機嫌なときに、気を使うことはありませんか。最近、風邪でない限り、保育所の大人はできればマスクをしない方がいいと言われているのはそのためですし、NICU（新生児集中治療室）でも看護師さんはなるべくマスクをしないで赤ちゃんを抱っこしようという動きもあるぐらい、顔と顔のコミュニケーションが重要だと言われています。

先生たちが毎日やっていらっしゃる保育は、とても大事なことです。もっと感謝されるべきだと思います。保育の仕事は疲れますから、どうぞご自身の心と体の健康を大事にしてください。なぜかと言えば、先生方の機嫌が良いことが、子どもたちにとって一番いいことだからです。先生方自身の機嫌が良くなければ子どもに優しくできませんし、親にも笑顔を向けられません。ご自身が一番大事です。今日、私から、「自分たちがやっている保育は立派なのだと褒められた」と思って帰っていただければ幸いです。